A study of Rifu area history from the medieval ages to early modern period

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹井, 英文 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24101

中近世移行期利府地域史の研究

竹井英文

はじめに

中世から近世にかけての時代に関しては、周知の通りこれまで政治史や社会経済史を中心に膨大な研究が積み重ねられてきた。その一方で、具体的な地域レベルでの変化のあり方については、これまで必ずしも十分検討されてきたわけではない。むろん、拠点城館や街道の整備などに代表される変化はこれまでも指摘されてきたが、地域のあらゆる事象を視野に入れ、全体としてどう変化していったのかという点については、未検討な部分が多いといえよう。こうした点から、近年では中近世移行期の地域史に対して諸方面から関心が高まりつつある。

近年の地域史研究では、文献史学、考古学、歴史地理学、城郭研究（縄張研究）、あるいは地質学のような理系の学問などをも駆使した学際的な研究を行うことが、もはや当たり前になってきている。扱う対象も、城館、城下町・都市的な場、村落、寺社、石造物、街道、航路、その他中世遺跡などあらゆるものに及んでいる。それら一つ一つを丁寧に検討しながら総合的に情報を把握し、地域の具体的な空間構造とその変容のあり方を明らかにする作業が各地で活発に行われており、事例検討が蓄積されつつあるのが現状といえよう[1]。

そうした中近世移行期地域史研究のなかで、特に近年注目が集まっているのが、城館論と街道論である。さまざまな面で地域の拠点であった城館と、地域と地域を繋ぐ街道との関係を中心に、広域的かつ動態的な地域史像を描く動きが登場してきている。その代表的な論者として、齋藤慎一氏と市村高男氏が挙げられる。

齋藤氏は、鎌倉を起点とする鎌倉街道を中心とした中世東国の主要道の変遷を検討し、それまで主要道となっていた鎌倉街道上道が享徳の乱あたりを境に重要性を低下させたこと、新たに小田原や江戸を中心とした街道が整備され、それと同時並行して拠点城館が変遷したことを明らかにした[2]。市村氏は、四国全域の城館分布と交通路との関係を検討し、ほとんどの城館が何らかの陸路や河川・海上交通路と密接な関係のもとに存在していること、公権力が整備した公的な街道だけでなく、生産や生活と不可分に結びついた民衆レベ

ルの道も多く存在すること、そのため道の多様性や階層性を踏まえて城館に関する議論も行う必要があることを指摘した。そして、そこから公権力による主要道の整備と拠点城館・城下町の充実化が、村や町、それらを結ぶ地方道、民衆レベルの道との格差を生み、地域社会全体に大きな変容をもたらしていた様子を浮き彫りにしている[3]。街道と城館の変遷を軸に地域社会全体の変化を検討する両者の研究は、今後の中近世移行期地域史研究の一つの指針になりえるものと考えている。

以上のような研究状況から東北地方をみてみると、こうした研究はまだまだ少ないのが現状ではないだろうか[4]。特に宮城県では城館跡の縄張図の作成もほとんど進んでいない状況であるし、中世遺跡の発掘調査事例も決して多くはない。文献史料が少ない地域であるがゆえに、城館跡を始めとした中世遺跡を中心に、歴史地理的な考察も加味して、総合的な地域史像を構築していくことがよりいっそう求められているといえよう。

こうした問題意識のもと、本稿では宮城県の利府地域をフィールドに、中近世移行期における地域構造の変容のあり方を検討していきたい。利府地域は、中世陸奥の南北交通の大動脈である奥大道が通る交通の要衝として有名である。しかし、近世の大動脈である奥州街道は利府地域を通らないことで知られる。街道の変遷が地域に与えた影響を考えるうえで最適な地域の一つと考える。

利府の地域史については、『利府村史』[5]や『水沢市史』[6]、『利府町誌』[7]において概説され、現時点でもなお一つの到達点となっている。しかし、政治史的な叙述が多く、やはり中近世移行期の地域史という点では言及が必ずしも十分になされていない。特に近世初頭についてはほとんど言及されていないのである。また、基礎史料の収集・検討や城館跡調査なども十分行われておらず、未解明の部分が多く残されているといわざるをえない。

一方で、利府地域は広義の陸奥府中の一角にあたるため、陸奥府中の研究のなかで言及されることが多い。陸奥府中に関する研究は、文献史料や発掘調査データが豊富なこともあり、質量ともに充実しており、後述するようにその基本的な構造が明らかになっている[8]。しかし、それらの研究の主たる対象は、あくまで多賀城や多賀国府町、岩切城など府中の中心部であり、利府地域そのものを具体的に検討したものは少ない。検討対象時期も鎌倉・南北朝期が中心であり、戦国期から近世にかけての研究はやはり少ないのが現状である。

以上のことから、城館と街道を中心に戦国期の利府地域の構造を明らかにしつつ、近世初頭にかけて利府地域がどのように変化していったのか、具体的に明らかにしていきたい。

（註1）各地域の個別研究となると、枚挙に暇がない。城館を中心とした近年の代表的な研究成果として、『韮山城跡「百年の計」きわめる・つたえる・いかす　郷土の誇り』（静岡県伊豆の国市、二〇一四年）や『岩櫃城跡総合調査報告書』（群馬県東吾妻町教育委員会、二〇一八年）、『北関東研究集会　伝統的武家の城下町』（レジュメ集。城下町科研・北関東研究集会事務局、二〇一七年）など仁木宏氏を中心

とした科研費「中世・近世移行期における守護所・城下町の総合的研究」の研究成果、後掲齋藤著書などが挙げられよう。

（註2）齋藤慎一『中世東国の道と城館』（東京大学出版会、二〇一〇年）。

（註3）市村高男「四国における中世城館と交通」（橋口定志編『中世社会への視角』高志書院、二〇一三年）。

（註4）そうしたなか、東北福祉大学岡田清一ゼミナールの一連の地域研究活動は、歴史学に限ったものではないものの、宮城県を中心とした東北の地域史研究として貴重な成果である（『岡田ゼミナール研究年報』全三九輯、東北福祉大学。三九輯は二〇一七年）。

（註5）『利府村誌』（利府村、一九六三年）。

（註6）『水沢市史』中世二（一九七六年）。

（註7）『利府町誌』（利府町、一九八六年）。

（註8）野崎　準「中世宮城郡内の若干の考古資料――留守氏関係の遺跡・遺物――」（『東北学院大学東北文化研究所紀要』第一〇号、一九七九年）、斉藤利男「荘園公領制社会における都市の構造と領域――地方都市と領主制――」（『歴史学研究』五三四号、一九八四年）、入間田宣夫・大石直正編『よみがえる中世七　みちのくの都多賀城・松島』（平凡社、一九九二年）、東北学院大学中世史研究会編『中世陸奥国府の研究』（ヨークベニマル、一九九四年）など。

第一章　中世～近世初頭の利府地域の概要

本章では、利府地域の歴史を具体的に検討するための前提として、中世陸奥府中の空間構造、および利府地域をめぐる戦国期～近世初頭の政治情勢について、諸先行研究に学びながらまとめてみたい。

（1）中世陸奥府中の空間構造

利府地域は、陸奥国府を中心とした中世陸奥府中の一部であった。陸奥府中の研究は、「留守家文書」「余目家文書」という希有な文献史料が残されているうえに、多賀城や岩切周辺には多くの中世遺跡や石造物などが残されており、発掘調査件数も多いことから、極めて進んでいる。それらの成果に基づき、主として鎌倉・南北朝期の陸奥府中の空間構造が詳細に明らかにされている（図1）。

陸奥府中の領域は、東は塩釜浦、西は岩切余目付近、南は七北田川を挟んで八幡荘と接し、北は宮城郡と黒川郡の郡境という広大なものであり、その大半が宮城郡高用名に含まれるとされる。府中の東西南北の境界には、東宮・西宮・南宮・北宮の四つの神社が祭られ、これらはすべて陸上・水上の交通路に関連していた。そのなかで利府地域は、陸奥府中の北部に位置し、北の玄関口にあたる地域であった。利府の「惣の関」は、中世陸奥の南北交通の大動脈である奥大道の関所が置かれたと考えられる重要な場所で、北宮もそのすぐ近くに所在しており、まさに陸奥府中の北の境界域であった。

陸奥府中の中心部は、古代の多賀城より西側、岩切・新田付近であったとされる。河原宿五日市場・冠屋市場などの市場が存在し、中世を通じてこの地域を支配し続けた留守氏関係の館・屋敷・寺社が集中していた。この都市的な場は、戦国期になると多賀国府町と呼ばれるようになり、西隣にある留守家の居城岩切城の城下町として機能していた。そしてそこには、奥大道が走っていた。奥大道の具体的な道筋は、時期による若干の変遷もあり確定できないが、お

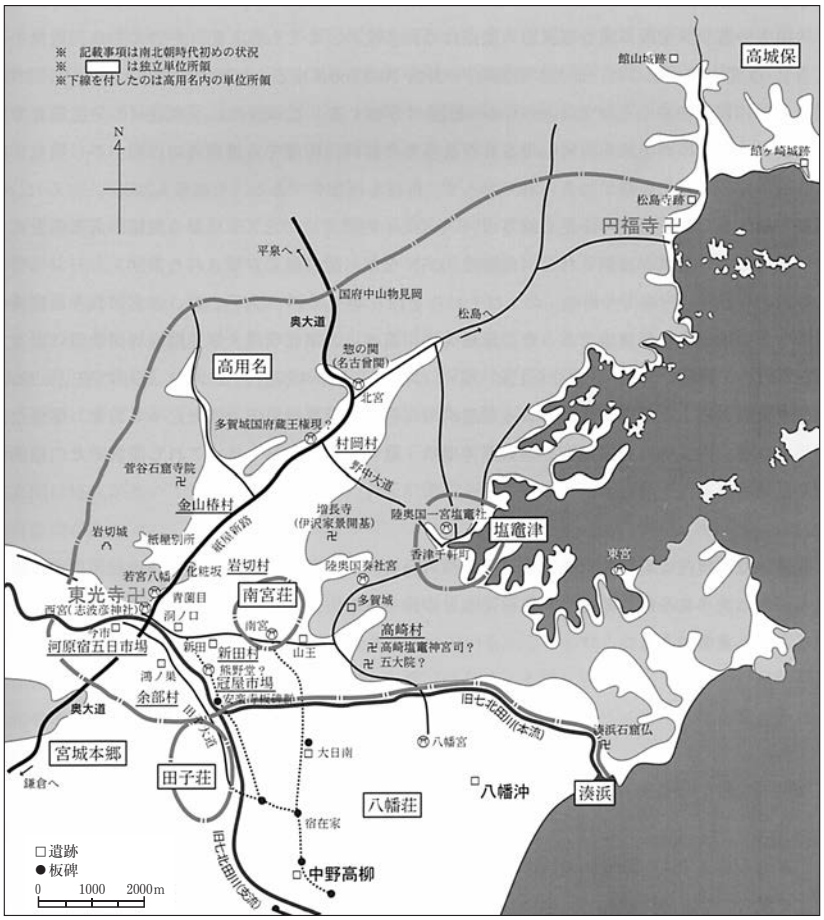

図１：中世の陸奥府中
（『松島町文化財調査報告書第５集　瑞巌寺境内遺跡』松島町教育委員会、2014年より引用。原図は斉藤利男氏作図）

およそ七北田川を渡って陸奥府中の中心を東北方向へ進み、そのまま利府地域に入って「惣の関」において進路を北へと変えて、黒川郡方面へと至るようになっていたことは確かなようである。特に利府地域での道筋は不明な点が多く、西側丘陵の裾を通って利府城跡の直下を経て「惣の関」へ至るような道筋、あるいは近世の石巻街道とほぼ重なる道筋の復元案が提示されている。(9)

この奥大道のほかにも、さまざまな道が存在していた。「大道」としては、府中中心部の七北田川沿いに南西方向へ延びる田子大道、利府の中心部付近から塩竈神社方面へと通じる野中大道が史料上から確認できる。「惣の関」から松島・高城方面へ至る近世の石巻街道に先行する道も、中世の一大霊場である松島へ向かう際の主要道として、古くから存在していたものと思われる。また、岩切から大和町石積に至る道(10)や、利府町沢乙から北上して黒川方面へと至る道もあったようである。奥州藤原氏攻めの際に陸奥府中にやってきた源頼朝は、先遣隊の小山朝政らが通った奥大道とは別の道を選択し、途中で奥大道と合流していることが『吾妻鏡』に記されているが(11)、この道は後者の沢乙から北上する道に該当すると考えられている。奥大道とともに、宮城郡と黒川郡を結ぶ南北交通路の一つになるが、その利用実態については不明な部分が多い。

さて、これまでの研究では、奥大道とともに宮城郡と黒川郡を結ぶもう一つの主要道の存在が指摘されている。いわゆる「山手の道」

である（図8）。南北朝内乱時に、七北田川沿いに位置する小曽沼城、一名坂城、山村城など南朝方の城館を北朝方の吉良氏が攻撃し、さらに山を越えて黒川郡の吉田城へ攻め入っていることが確認される[12]。おそらく、根白石から宮床方面へ抜けたものと考えられる。このルートは、近世の根白石在郷道に相当するもので、すでに南北朝期に存在し機能していたことがわかり、室町・戦国期も重要な道だった可能性が指摘されている。

このように、宮城郡と黒川郡を結ぶ南北交通路としては、奥大道と「山手の道」の二つが主要道といえるものだったと思われる。しかし、中世を通じての主要道は、奥大道の方と一般的には考えられている。

【史料1[13]】

角テ大さきより朔の上様、宮きへ馳給ふ、府中山、いたやとをりヲ、大木をきりふさくといへとも、事ともせす、そうの関へ御出張候間、留守殿おそれたてまつり、陣ヲ引退給ふ、其儘村岡ニ成、兄弟いせい無申計、

これは「奥州余目記録」の有名な一節で、室町期の応永年間の陸奥府中の様子が記されている。「朔の上様」＝大崎持詮が留守氏攻めに出陣した際に、「府中山」、「板屋通り」を通って「惣の関」へ出てきていることがわかる。このルートは、まさに一般的に知られている奥大道の道筋を示している。実は、奥大道も史料上に明確な利用事例が登場することは少ないのだが、この軍事行動のあり方からして、少なくとも室町期においては「惣の関」を通る奥大道こそ主要道であったといえよう[14]。

一方の「山手の道」の利用実態は極めて不明瞭で、南北朝期以後は史料上に明確に登場しない。どこまで権力によって維持管理・利用されていたのかは不明である。戦国期においては、利府城や黒川氏の居城である御所館、鶴巣館などの拠点城郭から離れていることもあり、機能していたとしても、奥大道と比較すればその地位の低さは指摘せざるをえないのではないだろうか。

南北朝・室町期の陸奥府中には、いくつかの城館が存在した。なかでも岩切城は著名だが、戦国期には留守氏の居城として大規模に拡張・整備されている。このほか、「新田城」や「府中城」なども史料上確認されるが、利府地域には「村岡城」が登場する[15]。後の利府城と同一の可能性が高い城だが、南北朝期の「城」は武士の屋敷を中核に臨時的に要塞化したものを指す場合もあり、必ずしも山城とは限らないため、なお要検討といえようか[16]。また、「奥州余目記録」によると、室町期に「稲沢館」なる城館が利府地域に築かれている[17]。稲沢なる地名は現在残っておらず、正確な現地比定はできない状態にあるが、「西城（館）」と「東館」から成り立っていたようであり、その規模からしてやはり利府城のことを指す可能性がある[18]。「村岡城」と「稲沢館」との関係も不明であり、いずれも今後の検討に委ねざるをえない。

以上、中世の陸奥府中の空間構造を、利府地域を中心に確認した。利府地域は、陸奥府中という空間の北側の玄関口にあたり、奥大道を始めとして黒川・大崎方面や松島方面へ至るさまざまな道が分岐

する交通の要衝であったことを改めて確認しておきたい。

（註9）前掲註（8）『よみがえる中世7　みちのくの都多賀城・松島』二六・二七頁、二二五頁。

（註10）小林清治「奥羽仕置と近世奥州街道」（同『小林清治著作集一　戦国大名伊達氏の領国支配』岩田書院、二〇一七年。初出一九八六年。四七〇頁）。

（註11）『吾妻鏡』文治五年八月十四日条。

（註12）「和賀義綱代某軍忠状」、「和賀義綱代野田六郎左衛門尉着到軍忠状」（『仙台市史』資料編一古代中世、一九二・一九三号、鬼柳文書）など。

（註13）「奥州余目記録」（『仙台市史』資料編一古代・中世、余目家文書一六号〈二四〇頁〉）。

（註14）このほか、天文十二年五月に葛西晴胤が伊達稙宗に呼応して黒川郡大谷へ出陣しており、奥大道を利用した可能性が高い（「伊達正統世次考」巻之九上、小林清治編『伊達史料集』下、八四頁）。

（註15）「石橋棟義軍勢催促状」（『仙台市史』資料編一古代・中世、留守家文書三五号）。

（註16）近年における南北朝期の城館研究については、向井一雄・齋藤慎一『日本城郭史』（吉川弘文館、二〇一七年）などを参照。

（註17）前掲註（13）二四〇・二四一頁。

（註18）なお、村岡氏の一族として稲沢氏がいるが、それとの関係も不明である。

（2）戦国期～近世初頭利府地域の政治情勢

次に、戦国期から近世初頭にかけての利府地域の政治情勢について、留守氏の動向を中心に諸先行研究[19]に拠りつつまとめておきたい。

室町期において、留守氏は大崎氏の強い影響下にあったが、伊達氏の影響力が強まってくると留守家中の伊達派により十三代持家が擁立され、続いて伊達持宗の三男郡宗を十四代当主に、明応・永正年間（一五〇〇年前後）には伊達尚宗の二男景宗を十六代当主として迎え入れるなどして、大崎方から伊達方への転換を明確にしていった。

十七代当主留守顕宗は、弘治二年（一五五六）に一族の村岡右兵衛・左衛門の反乱が起きるなど、家中統制が十分できないなか、永禄十年（一五六七）に伊達晴宗の息子政景を十八代当主として迎え入れた。顕宗には嫡子孫五郎がいたが、家中の伊達派の意見により政景の入嗣が強行されたという。これにより、留守家中の伊達派・反伊達派の家中争いが激化し、永禄十二年に政景と村岡右兵衛の全面対決へと至る。

この争いの背景については不明瞭な点が多いが、留守氏家臣団の由緒書である「寛永二十一年御家中由緒書上」[20]のなかに、それをうかがわせる記述がある。村岡氏の家臣であった郷家宮内少という武士が、「縁約」のことで村岡氏に恨みを持つようになり、郷家宮内少・修理・平左衛門の三人と小野下総が村岡から出奔して政景に仕えるようになったのだという。この記述が事実であるならば、村岡氏内部の紛争が一つのきっかけとなって、政景と村岡氏の対立が激化したということになろう。

争いはしばらく続いたものの、翌元亀元年（一五七〇）に政景は村岡氏を滅亡させた。これを機に、政景は岩切城を離れ、村岡氏の居城であった村岡城に本拠を移転させることになった。そしてこの

ときに、政景によって地名が村岡から利府に改称されたと一般的にいわれている。利府地域史にとって、元亀元年は非常に画期的な時期といえる。

ただ、政景が利府に移ったことを確実に示す史料は、残念ながら存在しないようである。それでも、「寛永二十一年御家中由緒書上」には、後藤惣助という牢人が「利府」へやってきて政景に仕えたことが記されているし[21]、後述するように『安永風土記』にもやはり元亀年間に利府へ移ったことをうかがわせる記述が散見されるため、正確な時期は不明なものの、移転自体は確かなことと考えてよいのだろう。その一方で、それまでの本拠であった岩切城は廃城となったとされることが多いが、これもまた確実に示す史料は存在せず、なお支城として存続していた可能性も残っている[22]。

その後の政景は、村岡氏に続いて余目氏や佐藤氏など家中の反対勢力を一掃し、自身の権力基盤を固めつつ、独立的な国衆のような立場でありながら、伊達一族として伊達輝宗・政宗に仕えて行動を共にするようになる。天正十五年（一五八七）に留守領の隣を領する国分氏に内紛が起きたときは、政景が沈静化に尽力しているし、続く大崎合戦では伊達軍の大将として出陣し、戦後処理にも奔走している。その際、政宗が留守領に隣接する松山の遠藤氏や大松沢の宮沢氏、松島の高城氏らに対して、政景と相談して行動するよう度々伝えていることから、政景が彼ら近隣領主を束ねる立場にあったといえる。また、しばしば政宗のもとを訪れて会談していることも「伊達天正日記」などからわかっており、伊達家の中枢部との関係も深かったことになる[23]。

天正十八年（一五九〇）七月、小田原北条氏を滅ぼした豊臣秀吉が会津黒川まで出陣し、奥羽仕置を実施した。これにより、奥羽の豊臣化が急速に進められていくことになったが、その直後から一連の仕置に反発する一揆が各地で勃発した。なかでも、特に大規模な一揆となったのが、大崎・葛西一揆であった。大崎氏・葛西氏は奥羽仕置により領地没収となり、その旧領の大部分は新たに入部した木村吉清に与えられたが、木村の過酷な支配に反発して大崎・葛西氏の旧臣を中心とした人々が一揆を起こしたとされている。この一揆鎮圧のため、秀吉は会津の蒲生氏郷と伊達政宗らを派遣したが、その際に政宗は米沢を発って十一月五日に利府に着陣し、それから黒川郡へ入っていることが諸史料から確認できる。この時期も、宮城郡から黒川郡へ向かう際には利府が中継地となっていたことがわかるが、一方の氏郷は松森から黒川郡へ向かっている。この点についての詳細は、後述したい。

奥羽仕置は、利府地域にも大きな影響を与えた。仕置の結果、同年秋に留守氏は改易となり、伊達氏家臣として利府から奥大道を北上して隣接する黒川郡の大谷保（大郷町）に転封されたといわれている[24]。ただし、大谷への転封を示す史料は『伊達治家記録』など後世の記録史料のみで、大谷保内のどこを本拠としていたのかさえ不明である。なお、これにともない、利府城も廃城となったと一般的にはいわれている。

留守氏が転封になった後の利府地域は、伊達氏の直轄領に編入さ

れたようである。内容については後述するが、文禄四年六月には「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」[25]という検地帳が作成され、現存している。伊達氏の直轄領として検地が行われたと考えられるので、少なくともこれ以前には留守氏が利府から離れていたことは事実であろう。

その後、政景は、さらに大谷保から磐井郡黄海（一関市）に転封され、二〇〇〇貫文を領するに至ったとされる[26]。しかし、これについても『伊達治家記録』などによる情報に基づいたものであり、確実な史料に欠けている。このように、総じて奥羽仕置以降、関ヶ原合戦前までの留守氏の動向は不明瞭な点が多く、今後の検討課題といえる。

再び留守政景が表舞台に登場するのは、関ヶ原の戦いのときである。いわゆる「北の関ヶ原」に際して、伊達氏は山形の最上氏と手を組み、上杉景勝と対立していたが、その最上氏救援のために政景を大将とした援軍が派遣されていることが知られている。このとき、政景は黄海を本拠としていたはずだが、当時もいまだ利府を拠点としており、そこから出陣したとされることも多い[27]。これが事実だとすると、利府城もまだ存続していたことになるが、これも『伊達治家記録』の記述によるものであり[28]、やはり具体的に物語る史料は存在しないようである。関ヶ原の戦い以後の利府地域については、第三章にて詳しく検討することにしたい。

以上、中世から近世にかけての利府地域の歴史を概観したが、本章の終わりに利府という地名について、言を加えたい。利府という地名は、「留守氏系譜」など後世の記録史料によると、元亀元年に留守政景が岩切城から村岡城に本拠を移した際に、村岡を利府と改めたことにより誕生したという[29]。政景による新たな支配の開始を象徴するような出来事といえ、信長による岐阜改称のように、こうした地名の変更は戦国期においてしばしばみられることである。

しかし、当時の一次史料をみる限りでは、戦国末期に至っても「利府」と記されることはないようである。留守政景が高森城（岩切城）の城主であったことから「高森殿」と呼称されたことは有名だが、利府に移転してからもなお「高森殿」と呼ばれており、「利府殿」と記すものは今のところ見出せない。

では、どのように表現されているのか。実は、政景やその在所については「宮城」と記されることが非常に多い。もちろん、政景が本拠を置く宮城郡を指す概念として「宮城」が使われていることも多いが、そうではない特定の場所を指す場合もある。たとえば、天正十五年三月二十五日付けの伊達政宗過所朱印状[30]には「二本松より宮城迄」と、天正十八年十一月に大崎・葛西一揆討伐のため、政宗が大崎方面へ向かうにあたって利府に着陣した際にも「牢人之上乍大義、宮城へ来五日ニ出合[31]」「まつまつミやきへんニ馬をたて候へく候[32]」「昨日五日、当号宮城令着馬候[33]」などである。中世には近隣の苦竹郷が「宮城本郷」と呼ばれていたことも確認できるが、拠点となる場ではないので、その周辺ではないだろう。特に「号宮城令着馬候」の「宮城」とは、関連史料から明らかに利府のことなのだが、あくまで「宮城」と出てくるのである。

筆者が調べた限りでは、一次史料に「利府」が登場するのは、前掲文禄四年六月の「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」が初めてで、それ以降はほかの一次史料でも「利府」と記されるようになり、「宮城」と記されることは基本的にはなくなる。こうしたことから、あるいは天正十八年十二月以降に利府と改称された可能性もあるのかもしれない。(34)

(註19)『仙台市史』通史編二古代中世、『水沢市史』中世二を主として参照した。

(註20) 菅野正道「【史料紹介】『寛永二十一年御家中由緒書上』――中世留守氏家臣団関係史料――」(『市史せんだい』vol.一六、二〇〇六年)九四頁。

(註21) 前掲註(20)九三頁。

(註22) 元亀年間の利府移転が事実だとすると、なぜその時期に行われたのかという問題を考えることも必要であろう。元亀元年は、伊達輝宗に対する中野宗時らの謀反が起きた時期として知られている。こうした伊達氏権力の混乱状況と関わりがあるのだろうか。また、岩切からさらに北の利府へ移転したということは、北の地域を意識したものとも考えられる。この時期に大崎・葛西方面と留守氏、さらには伊達氏との関係に何か変化があったのだろうか。そもそも、岩切と利府は極めて至近距離にあるため、わざわざ移転することのメリットは何であったのか。本拠の移転は、人や物の移動にとどまらず、それまでの領国構造そのものに大きな変化をもたらす事態といえるが、留守氏の利府移転の問題は不明瞭な部分が多く、その解明は今後の課題といわざるをえない。

(註23) 戦国期の留守政景については、佐藤貴浩「留守政景と伊達氏」(『駒澤大学大学院史学論集』第三七号、二〇〇七年)を参照。

(註24)『貞山公治家記録』巻之十四(『伊達治家記録』二、宝文堂、二一五頁)。

(註25)『宮城県史』三〇、六九三号、伊達家文書。

(註26)『貞山公治家記録』巻之十七(『伊達治家記録』二、宝文堂、三二五頁)。

(註27) 前掲註(7)一四八頁など。

(註28)『貞山公治家記録』巻之二十上(『伊達治家記録』二、宝文堂、四五一頁)。

(註29)「留守氏家譜」(『水沢市史』七、一三二頁)など。

(註30)「伊達政宗過所朱印状」(『仙台市史 伊達政宗文書』〈以下『仙伊』と略す〉九九号、斎藤家文書)。

(註31)「伊達政宗書状写」(『仙伊』七七八号、『引証記』十四)。

(註32)「伊達政宗書状」(『仙伊』七七九号、湯目家文書)。

(註33)「伊達政宗書状写」(『仙伊』七八〇号、『引証記』十四)。

(註34) 仮にそうだとすると、豊臣政権による奥羽支配の骨格が定まった奥羽再仕置後の可能性があろうか。留守氏が転封になったことも大きな契機であろう。会津若松を始め、奥羽仕置を経て各地の地名が改称されていることは周知の通りである。それらとの関係から、利府という地名の誕生についても再検討する必要があるかもしれない。なお、一点だけ、天正十八年七月廿九日付けの葛西晴信書状(『岩手県戦国期文書』Ⅱ、一〇九号、大籠首藤文書)に「今度利府表出張之所、盛重以下松島高木郷出張之由…早々利府寺崎民部少輔改可被渡…利府江可被渡…」というように「利府」が登場する。しかし、本文書は明らかに偽文書であり、この段階で確実に「利府」という地名が存在したことを示す史料にはなりえない。

第二章　戦国期利府地域の城館

第一章の内容を踏まえて、中近世移行期における利府地域の実態について具体的に検討していきたいが、その前に本章では利府地域の城館について検討したい。地域の構造を考えるうえで、城館の配

置や構造を押さえることは必要不可欠である。利府地域を代表する城館は、利府城（村岡城）である。そのため、まずは利府城の構造について検討し、その後にその他の城館について検討することにしたい。

なお、留守政景が利府に移る以前の村岡氏段階の村岡城や関連城館については、第一章で触れた「奥州余目記録」にみえる室町期の記述以外、物語る史料が存在しないため、詳細は不明といわざるをえない。そのため、以下の検討は留守政景が利府に移った後の時期が主となることを先に断っておく。

（1）利府城について

利府城は、早くから公園化されてしまったこともあり、留守氏の居城であるにもかかわらず遺構の残存具合は悪いといわざるをえない。ただ、それでもおおよその曲輪割りは十分把握可能で、一部には土塁や曲輪もみられる。縄張図は、紫桃正隆氏[35]や『日本城郭大系』[36]、本堂寿一氏[37]によるものがこれまで公開されており、基本的な構造は明らかになっている。しかし、城下町を含めた利府城そのものの研究はいまだ十分なされていないのが現状である。それは、利府城以外の周辺城館についても同様であり、研究の基本となる縄張図の作成も遅れている。こうした研究状況を踏まえつつ、本章ではまず利府城を中心とした周辺の城館について検討したい。

留守氏の居城である利府城は、中心部が現在館山公園となっている（図2）。公園の範囲内には東西二つのピークがあり、東側は「桜の園」、西側は「頂上広場」と現在名付けられており、それぞれ東西一〇〇mほどの規模をもつ広い曲輪となっているが、東側の方がやや高くなっている。そのため、東側が主郭とされることが多い。この二つのピークを中心として、さらに周囲に大小の曲輪、帯曲輪状の平坦地を配するという構造になっている。両者の間には谷が入っていることから、これが両者を遮断する堀切の役割を果たしていたと考えられる。

狭義の利府城はこの範囲となるが、本堂氏の縄張図ではさらに西側へと続く丘陵部も城域として捉えている。この丘陵は、徐々に低くなりながら現在のイオンモール利府あたりまで伸びている。どこまでが城域といえるのか不明なものの、「新館」「堀切前」などの地名があるあたりまでは城域として考えてもよいと思われる。「宮城県遺跡地図」[38]でも、「堀切前」「寺下」の楊岐寺周辺まで遺跡範囲としている。おそらく、丘陵部の数ヶ所に谷や堀切が入る形で曲輪群が続いていたのだろう。

一方、公園の東北側も城域のようである。紫桃氏・本堂氏の縄張図では、この東北側の部分については描かれていないが、『日本城郭大系』の縄張図では土塁囲みの曲輪が描かれており、「桜の園」よりもさらに高所となっていることから、ここを主郭としているのである（図3）。この指摘は重要だろう。この部分は、現在は山林と化しているが、実際に歩いてみると、西側から南側にかけて段々状の曲輪が四段ほどみられ、それぞれ西側斜面に向けて帯曲輪状に細長く続いていく。ピークの部分には、『日本城郭大系』の縄張図

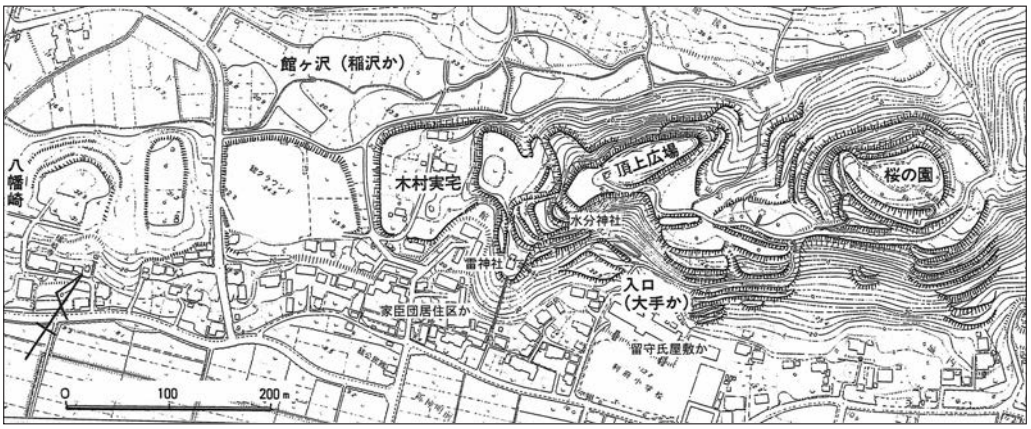

図２：利府城縄張図
（（註37）本堂論文より引用・加筆）

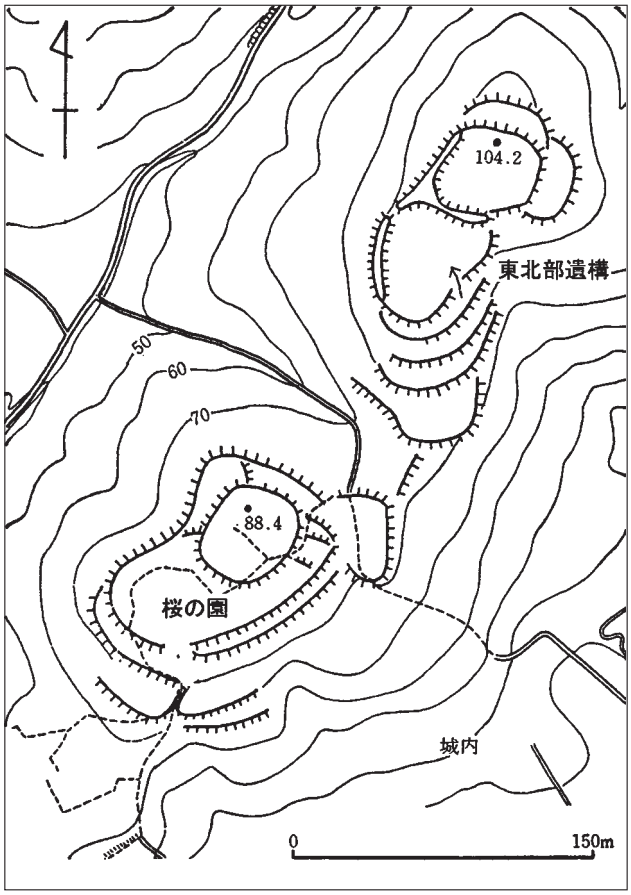

図３：利府城東北部縄張図
（『日本城郭大系』３、新人物往来社、1981年より引用・加筆）

とはやや異なる、L字型の土塁を持つ広い曲輪がはっきり残っている。その曲輪内をさらに東側に進むと、道や虎口状の地形もみられるが、詳細不明である。西側斜面の段々状の細長い曲輪は、あるいは植林関係の可能性も考えられるが、ピーク部分の土塁はしっかりしたものであり、城の一部と考えてよいだろう。

このように、正確な城域については不明瞭なものの、公園の範囲内にとどまらない広大な城であることは間違いなさそうであり、中心部は公園内とその東北側、合わせて三つのピーク・曲輪群から基本的には構成されていたと考えるのが無難だろう。この構造をどのように理解するのかが問題となるが、現状では遺構の破壊が激しく、堀切や横堀、城道などを確認することは難しい。しかし、谷によって三つの曲輪群が分けられているということ自体は確かであり、それぞれが独立した形となっていることは十分指摘できるのではないだろうか。こうした構造は、東北地方でしばしばみられる、主郭の求心性が弱く各曲輪が並列し寄せ集まる形で構成されている、いわゆる群郭式城郭に類似したものと考えられる。一般に、群郭式城郭は一揆的な権力構造を反映したものといわれている[39]。利府城の城主である留守氏も、政景の代に有力家中の討伐が進められたものの、自立的な家臣を多く抱えながら成り立っている権力であることから、そうした権力構造が反映された縄張構造と評価できるかもしれない。ただし、三つのピークには高低差がはっきりあることも改めて指摘しておきたい。

利府城は、過去に「桜の園」の敷地の一部で発掘調査が実施されている。出土品の一部は利府町郷土資料館に展示されており、瀬戸美濃の陶磁器など戦国期の遺物が出土していることが確認できる。しかし、報告書が未刊行であるため、詳細が不明であることは残念である。

次に、利府城の麓に注目したい。利府城の正面は、街道が通り開けている南側であることは間違いないだろう。大手も南側のどこかにあったはずである。この南麓には、留守氏当主や重臣・家臣団の屋敷が広がり、特に利府小学校の場所に留守氏の屋敷があった可能性が以前からたびたび指摘されている。何らかの施設があってしかるべき場所であるが、考古学的な所見もなく、古地図などを見ても詳細は不明であるため、ここでは可能性が高いという程度にとどめておく。

城跡の北麓にも何らかの施設があった可能性がある。北麓は東西に細長い谷が入り込んでおり、地名は「館裏」「館ヶ沢」である。古代から中世前期の遺跡である館ヶ沢A遺跡・B遺跡があるものの、下限は平安期であり戦国期の遺構・遺物は出土していない。北麓は日当たりや眺望が悪く手狭であることから、施設があったとしても小規模なものであろう。

以上が利府城の構造についての私見となるが、もう一点注目すべき点がある。近年、城郭と聖地との関係が改めてクローズアップされている[40]。実は中世前期の村岡には、金峰山堂（多賀国府感王権現）という留守家にとって重要な宗教施設が存在していたことが「余目家文書」などから知られ[41]、その場所は利府城の地であったようであ

る。後述するように、近世にも利府城の地に蔵王権現を勧請した白金神社が存在しており、中世の金峰山堂の名残と考えられる。つまり、利府城は中世府中における一種の聖地に築かれた城ということになる。こうしたことは、岩切城については指摘されてきたが、利府城についても同様と考えられ、そうした側面から検討を深めていくことも今後必要だろう。

（註35）紫桃正隆「利府城」（同『史料　仙台領内古城・館』第三巻、宝文堂、一九七三年、五六七頁）。

（註36）「利府城」（『日本城郭大系』二、新人物往来社、一九八〇年、三〇四頁）。

（註37）本堂寿一「宮城県留守領における中世城館発達史――岩切城とその周辺城館――」（『北上市立博物館研究報告』第一四号、二〇〇三年）。

（註38）「宮城県遺跡地図情報」（https://www.pref.miyagi.jp/site/maizou/bunkazaimap.html）を参照した。

（註39）千田嘉博「戦国期城郭の地域性」（同『織豊系城郭の形成』東京大学出版会、二〇〇〇年、初出一九九〇年）。近年では、宮武正登氏が改めて群郭式城郭について検討し、同様の特徴を抽出しつつ、それが南九州や東北に限定されない形態であることを指摘している（同「南九州地方の中世城郭に対する歴史的再評価」『鹿児島考古』第四八号、二〇一八年）。ただし、必ずしも独立的・並列的ではなく、地形・地質に左右された側面が大きく、主郭の求心性を十分読み取ることができることも多いとの批判的な見解もある（松岡進「中世城郭群」遠藤ゆり子編『東北の中世史四　伊達氏と戦国争乱』吉川弘文館、二〇一六年）。

（註40）伊藤清郎『中世の城と祈り――出羽南部を中心に――』（岩田書院、一九九八年）、中澤克昭『中世の武力と城郭』（吉川弘文館、一九九九年）、中井均・齋藤慎一『歴史家の城歩き』（高志書院、二〇一六年）など。

（註41）「畠山国氏寄進状」（『仙台市史』資料編一古代・中世、余目家文書八号）。

（2）利府城周辺の城館

次に、利府城以外の戦国期留守領の城館についてみてみたい。『日本城郭大系』や紫桃正隆『史料　仙台領内古城・館』などにより、城館の存在と位置など基本情報は明らかになっている。また、本堂寿一氏が陸奥府中に存在する城館の縄張図を作成しつつ、その特徴を考察している。ここでは、それらの成果を踏まえて、特に利府町域の城館について検討したい。

留守領の城館としては、利府城、岩切城のほか、摂津守館、深山館、菅谷城、化粧坂城、南宮館、小鶴城、狛犬城などが挙げられる。このうち、菅谷城、摂津守館、深山館が利府地域に所在するが、戦国期当時の文献史料に明確に登場するものは、岩切城を含め残念ながら存在しない。ほとんどは、近世の編纂史料・地誌類の記述に拠っているのである。

しかし、前掲「寛永二十一年御家中由緒書上」には、南宮館、小鶴城、菅谷城が登場する。江戸初期の記録ながら、家臣の父や祖父の代の出来事が記されている点で、ある程度信憑性がある史料といえよう。南宮館は、「上南宮」と登場し、留守景宗に仕えた小畑七郎左衛門・丹後が在城していたという[42]。小鶴城は、「西城」と「東城」に分かれており、国分領との境目の城として機能していたようである。「西城」には辺見丹波、佐藤対馬・六郎左衛門が、「東城」には

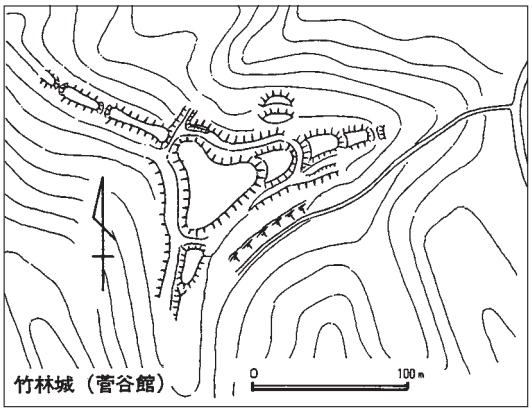

図４：菅谷城縄張図
（（註（37）本堂論文より引用）

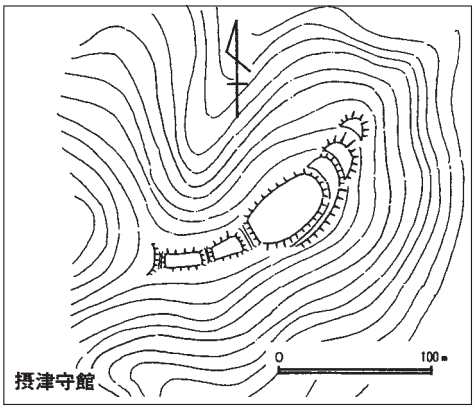

図５：摂津守館縄張図
（（註（37）本堂論文より引用）

吉田豊後・又右衛門・掃部が在城していたという(43)。

そして、利府地域の菅谷城には、川嶋三河・但馬父子が在城していたという(44)。菅谷城は、菅谷地区の西の奥まったところに位置する小・中規模の城館である（図4）。奥大道沿いではあるが、本道からはいささか離れた場所にあり、奥大道を直接押さえるような立地とはいえない。そのため、その求められた機能については不明瞭である。あるいは山道を伝って大和町方面へ抜けていたのであろうか。本堂氏の縄張図によると、曲輪数ヶ所と堀切数本から成っている。留守氏の一族である菅谷氏の居城といわれているが、留守氏家臣が在城し、支城として機能していたことがうかがわれる点で興味深い(45)。これらは、いずれも留守政景時代の出来事を記しているので、元亀・天正期には存在し機能していたことがうかがわれる。

利府町域の残りの二城についても検討しておこう。利府城から山続きの東側、「惣の関」を見下ろす山上にある摂津守館は、『安永風土記』によると、留守政景の家臣の居館との伝承があるという(46)。本堂氏の縄張図によれば、曲輪数ヶ所と堀切数本からなる比較的小規模な城館である（図5）。構造的には、領主の居城というよりは、交通管理や物見のための城館といえようか。この点は後述したい。

以上の城館のほかにも、これまでの研究ではまったく触れられていない城館がある。それが、利府町沢乙深山・熊野堂に所在する深山館である。仙台から古川へと向かう東北新幹線の最初のトンネル上が城跡である。城域南端には熊野神社が鎮座しており、南麓から急傾斜ではあるが参道が通じているため容易に到達できる。熊野神

社の創建は不明だが、『安永風土記』には登場し、宝永七年（一七一〇）に再建したというので、近世に成立したのだろう。[47] そのため、この参道は中世には存在しなかったと考えたい。一方、西北側は利府高校の敷地となっており、城内を通ってグラウンド脇の道路へ出ることもできる。

深山館は、紫桃正隆『史料　仙台領内古城・館』や『日本城郭大系』、『利府町誌』にも立項されておらず、昭和五六年版の『宮城県遺跡地図』にも登録されていない。しかし、昭和六三年版には明記されていることから、この間に存在が認知され遺跡登録された城館ということになる。このため、いまだほとんど知られていない城館といえる。なお、本堂氏は近隣の心月寺裏山を深山館としているが、その根拠は不明である。[48] 深山館の縄張図は未作成であったため、今回調査・作図した（図6）。これをもとに、深山館の構造を詳しくみていこう。

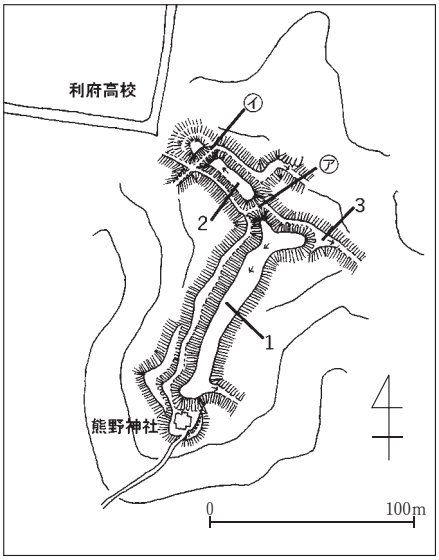

図6：深山館縄張図
（2017年4月29日、12月3日調査。
作図：竹井英文。協力：青山大知、岡田涼也、佐藤耕太郎、佐藤由浩、奈良輪俊幸、三田泰大、湯浅哲平）

小規模な城ではあるが、遺構は比較的よく残されている。熊野神社の裏、南北に一〇〇mほど続く細長い「1」が城内最大の曲輪で、ほぼ平坦であるが北側がやや高くなっている。「1」は北端で西北方向へ曲がるが、そのあたりが城内の最高所となっており、大きな堀切「㋐」が設けられている（写真1）。こうしたことから、「1」を主郭と考えてよいのではないだろうか。この大きな堀切は堀底道のようになっており、「1」の最高所北側直下を経て東側にある小さな曲輪「3」へ繋がっている。そこからさらに東側へ尾根が延びているが、新幹線のトンネル直上で状況がよくないため、未調査である。

「1」の大きな堀切の向かい側にあるのが「2」である。小規模な曲輪で、内部の削平は甘いものの、西端にやや小規模な堀切「㋑」が明瞭に残っている（写真2）。その先にも曲輪が続いていたと思われ、一部が残存しているものの、利府高校の敷地内として破壊されており、詳細は不明である。いずれの曲輪も土塁はみられない。

古地図や航空写真をみると、主郭を中心に西北と東に尾根が延び、西北側には道も描かれているため、本来の城域は西北方向・東方向にさらに広がっていたものと推定される。特に東尾根は一定の広さ・長さがあり起伏も少ないようにみえるため、大きな曲輪があった可能性がある。また、開発前の航空写真をみると、西北尾根の林の一部に線状にみえる部分が複数箇所ある。道あるいは堀切の可能性があり、本来は西北側に曲輪と堀切が複数存在していたのか

写真１：深山館堀切㋐

写真２：深山館堀切㋑

もしれない。全体的に、利府高校や東北新幹線などの建設により、城域の半分近くが破壊されてしまったものと考えられる。かりにそうであったとしても、小規模な城館であることには変わりないだろう。摂津守館とほぼ同規模の城館といえよう。こうしたことから、摂津守館と同様、深山館も領主の居城というよりも、交通管理や物見のための城館として評価すべきと思われる。

深山館の歴史を直接物語る史料は存在しないが、やはり「寛永二十一年御家中由緒書上」に興味深い記述がある。

【史料2[49]】

小幡修理

一、祖父備中、親ハ式部ト申候、高森譜代御座候、上野殿より北橋・沢乙ト申所二ケ所知行被下、御奉公仕候

これによると、留守氏家臣の小幡氏が、深山館が所在する北橋・沢乙を知行していたことが判明する。むろん、あくまで知行している事実のみなので、これでもって小幡氏が深山館の城主とするような評価は単純にはできないが、それでも何らかの形で深山館と関係していた可能性はあるだろう。

（註42）前掲註（20）八九頁。
（註43）前掲註（20）九四・九五頁。
（註44）前掲註（20）九四頁。
（註45）なお、丹治英一『利府歴史漫歩』（丹治英一、一九九二年、一一頁）によると、菅谷城は平成三年に一部で発掘調査が行われたという。同書にはその時の図が掲載されており、土塁や堀、柵跡などが出土

しているようである。しかし、やはり報告書が未刊であり、詳細不明なのが残念である。

（註46）「宮城郡利府本郷風土記御用書出」（『宮城県史』二四、三七三頁）。
（註47）前掲註（7）八七三頁。
（註48）前掲註（37）本堂論文一八頁。
（註49）前掲註（20）九三頁。

第三章　戦国期利府地域の空間構造

本章では、前章での検討に加え、利府城の城下町や街道などについても検討し、戦国期における利府地域の具体的な空間構造を復元してみたい。

（1）利府城と城下町

戦国期の利府城は、この地域の拠点城館であった。そのため、それに付随する城下町が存在していたはずである。それはどこにあり、どのような構造をしていたのだろうか。

このことについても、本堂氏の研究がほぼ唯一のものといえる。本堂氏は、「北東から南西に延びる館山の南東側平地に丘陵沿いに古道が走り、その麓側道路沿いに侍屋敷（城内）が区画され、道路から反対側に約二〇〇ｍの幅に水田地帯（城前）を残し、現在の市街地中心部である大町に町人町を配したのであったか」と推測しつつも、利府宿の計画的な町割りを踏まえて「利府本郷はその名前から推測して留守政景入城時に出現の端緒があったとしても、江戸時代となって整備された町割りであり、政景時代の城下町とするには問題ありと考えざるを得ない」としている。(50) 近世の利府宿の地に戦国期にも町人町が配された可能性を指摘しつつも、全体的には否定的な見解となっている。

果たして、近世の利府宿は、戦国期の利府城下町とはまったく別物だったのだろうか。利府城の麓に家臣団屋敷が展開していたという推測は、筆者も大きな異論はなく基本的には支持したい。一方、城下町については、前掲「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」の内容から、すでに近世の利府宿と同じ場所にある程度の城下町が形成されていた可能性が『利府町誌』などで指摘されている。そこには、中町、三日町、大町、南町、八幡町、東町の六町が登場し、各町を統括する検断も置かれていた。この六町のうち、三日町以外は近世利府宿の町名と同じであり、文禄四年段階でこれらがすでに成立していたことがわかる。これらの町が文禄期のわずか数年で成立するとは考えにくいため、戦国期においてすでに存在していた可能性は高いだろう。

たしかに、天正十八年以前の戦国期の利府城下町の様子を物語る史料は、極めて少ない。同時代の文書史料となると、前掲天正十五年三月二十五日付けの伊達政宗過所朱印状(51)が唯一のものと思われる。そこでは、商人の斎藤因幡守に対して、一年に三度、十疋十駄に限り、二本松・「宮城」間の往復を認めるというものである。この「宮城」は直接的には利府城下町を指すと考えられ、都市としての実態があったということはできよう。

同時代の史料はこれのみだが、後世の史料からある程度復元することが可能である。『安永風土記』を中心に、戦国期の利府城下町に関わる記述を抜き出してみたい[52]。

まずは、寺社に注目したい。旧利府城内には、白金神社と雷神社が存在していた。白金神社は、留守氏の祖である伊沢家景が娘の安産を祈って、銀杏の木の元に和泉国の蔵王権現を勧請したのが由来という。先述した金峯山堂の後身と考えられる。本社は水分神社とも呼ばれており、一説では留守政景の妻女の安産が成就したために造営され、天正九年（一五八一）九月九日から祭礼を行うようになったともいう。雷神社は、伝承によると、永禄二年（一五五九）の干ばつ時に祀られたという[53]。両神社とも、現在も城内に祀られている。

次に、城下町の寺社である。八幡社、鼻取地蔵、円城寺、自性院が挙げられる。八幡社は、源義家が「東夷御征罰」のときに加瀬村から遠矢を射て落ちた場所に勧請されたという。鼻取地蔵は、もとは岩出山にあったものの、後に円城寺へ移されたという。一部の伝承では、元亀年間にはすでに存在していたようである[54]。浄土宗の円城寺は、元亀二年（一五七一）四月に笈弁上人による開山と伝わる。時期は不明だが、伝承によると禅寺とも呼ばれたという。天正十八年の大崎・葛西一揆の際に伊達政宗が在陣、軍議を開いたともいわれている。元和二年に伊達政宗が狩猟を行った際に休憩所として利用し、寺領を与える朱印状を拝領したという。修験寺院の自性院は、開山時期は不明だが、永観なる人物が天正元年（一五七三）に中興したと伝わる。四つのうち、自性院は現在廃寺となっているが、ほかの三つは現在も残っている。

このなかで特に重要なのは、円城寺と自性院に関する記述である。円城寺が元亀二年開山、自性院が天正元年中興ということから、留守政景が利府城に在城していた時期にこの二寺はすでに存在していたことになるからである。両寺ともに寺地を移転させたようなことも特に記されていないため、当初から存在した寺院と考えて問題なかろう。

なお、自性院という修験寺院が天正元年に中興されたという伝承自体も興味深い。戦国期は、東国各地で領主と結びつきつつ修験寺院が中興・再興される事例が多く、その修験寺院は近世にかけて周辺の寺社や山林などまで管轄して自身の経済基盤とし、領主だけでなく地域民衆とも密接に関わるようになっていくことが指摘されている[55]。実際、『安永風土記』によると、自性院も白金神社や雷神社などの別当となっていることが確認できる。つまり、天正元年の自性院の中興という事態は、戦国期の一般的な修験寺院の動向と合致しているものといえ、明記はされていないが利府の領主たる留守氏が中興に積極的に関わった可能性が高いのではないだろうか。

次に、利府城下町の住人についてみてみたい。前掲文禄四年の「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」の「御公領」分では、名請人となっている者のなかに、留守氏の家臣と同名のものが多数存在していることが、やはり『利府町誌』などで指摘されている[56]。ここから、留守氏の家臣団の一部が近世利府宿の地に集住していたことが確認できる。また、「塩竈禰宜分」では、名請人として塩竈神社の神官が多

数登録されている。留守氏が利府へ移る以前の、岩切城下町である多賀国府町の実態を記した戦国期の「留守氏分限帳」によると、家臣団が多賀国府町に在家を保有し、塩竈神社の神官らが多数居住していたことが知られる[57]。利府城下町も、多賀国府町と同様の構造をしていたものと思われ、町の移転が行われたことを示唆するものといえよう。

また、『安永風土記』では、大肝煎以下の格をもつ由緒ある上層農民である「品替之御百姓」として、「大町屋敷」の肝入検断の惣吉が唯一挙げられている。ここの記述は重要なので、以下掲出したい。

【史料3[58]】

右、惣吉義、先祖多賀御城主様御時代、当郡岩切村町場之節、御百姓ニ相立、右町検断弐拾九代引続相勤候由申伝処、弐拾九代目宇佐美彦兵衛代、文亀年中当利府町江取移、不相替検断相勤候由ニ御座候得共、文亀何年ニ候哉、右年月并彦兵衛以前廿八代之名前共ニ相知兼申候、依而彦兵衛代ゟ御書上仕候、文亀元年ゟ当安永三年迄弐百七拾弐年ニ罷成申候事（後略）

これによると、宇佐美家はもともと岩切町（多賀国府町）の検断であったが、二十九代彦兵衛のときに岩切から利府へ移住し、変わらず検断を勤め続けたとある。その年代だが、ここでは「文亀」年間としている。しかし、これは古くは『仙臺市史』（旧市史）や『利府町誌』などの諸書ですでに指摘しているように、「元亀」年間の誤りとみて間違いないだろう。元亀年間であれば、元亀元年に留守政景が村岡氏を滅ぼして利府城へ本拠を移したといわれていることと符合する。つまり、政景とともに岩切から移住した歴史を物語っていることになるのである。

同じく『安永風土記』の「加瀬村」の項では、「代数有之御百姓書出」として「南町屋敷」の熊蔵が挙げられている[59]。この家の初代小幡土佐守の父は、天童氏滅亡の際に利府へ移住して「御百姓」となったとされている。天童氏の滅亡とは、天正十二年に最上義光が天童頼久を滅ぼした出来事を指すと思われる。留守氏を頼って落ち延びてきたはずであり、天正十年代に利府城・城下町が留守氏の拠点となっていた傍証にもなろう。

以上、文禄四年六月の「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」および『安永風土記』に見える内容から、少なくとも戦国末期には近世の利府宿と同じ場所、つまり城と水田地帯を挟んでやや離れた位置に城下町といえる場がある程度形成されていたと考えてよいのではないだろうか。そして、留守氏家臣団や塩竈神社関係者の一部の移住、宇佐美彦兵衛のような留守氏と繋がりの深い町人の移住、小幡熊蔵家のような他地域からの移住、円城寺のような寺社の建立・中興などによって、町の基礎が徐々に形成されていったことも同時にうかがわれよう。

こうした城と城下町のあり方は、同時期のほかの城と城下町と比較してどうだろうか。伊達氏の本拠だった桑折西山城の場合は、やはり各曲輪が独立的に集まって成り立っており、城の麓に家臣団屋敷が展開し、河川を挟んだ対岸に奥大道が走り、それに沿って城下

町（桑折町）が展開していた。川崎町の前川本城の場合は、縄張こそ求心的な構造をとっているが、轟川の対岸に笹谷街道が走り、それに沿って計画的に造られた城下町（本屋敷遺跡）があった。近隣の松森城・城下町も類似の構造といえよう。[60] これらの景観と利府城・城下町の景観は、ほぼ同様のものといえ、当時一般的にみられたものということになる。

（註50）前掲註（37）本堂論文一六頁。
（註51）前掲註（30）。
（註52）以下の寺社に関する記述は、『安永風土記』のうち、利府本郷・加瀬村の項を参照した（『宮城県史』二四）。
（註53）前掲註（7）八六三頁。
（註54）前掲註（7）九七六頁。
（註55）新井浩文「戦国期幸手領における領域概念と宗教」（同『関東の戦国期領主と流通――岩付・幸手・関宿――』岩田書院、二〇一一年。初出一九九三年）など。
（註56）前掲註（7）一六四頁。
（註57）「留守分限帳」については、『利府町誌』のほか、大石直正「陸奥国の戦国都市」（大石直正・小林清治編『陸奥国の戦国社会』高志書院、二〇〇四年）などにも詳しい。
（註58）「宮城郡利府本郷風土記御用書出」（『宮城県史』二四、三七〇頁）。
（註59）「宮城郡加瀬村代数有之御百姓書出」（『宮城県史』二四、三六三頁）。
（註60）飯村均・室野秀文編『東北の名城を歩く　南関東編』（吉川弘文館、二〇一七年）などを参照。

（2）戦国期利府地域の街道について

第一章で述べたように、中世の利府地域には、「大道」として奥大道と野中大道があったことがわかっている。このうち野中大道は、近世では利府宿の一部を含む加瀬村と塩竈神社を結ぶ街道であり、近世においても主要な街道の一つであったことが知られている。戦国期の具体的な道筋は不明なものの、留守氏は塩竈神社の神主でもあり、それは政景の代でも変わりなかったため、政景が利府に本拠を移したことにともなって野中大道の重要性も高まり、利府城下町の形成にもある程度の影響を与えたものと考えられる。先述のように、前掲「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」には、塩竈神社の神官らが多数登録されており、野中大道を通じて利府と塩釜を往復していたことになろう。

一方、奥大道は中世陸奥における南北交通の大動脈であり、それは戦国期においても変わらなかったと思われる。利府城は基本的にはこの二つの主要道、なかでも直接的には城下を走る奥大道を押さえる目的から築かれたと考えられる。

では、戦国期の奥大道の具体的な道筋はどのようなものだったのだろうか。戦国期の利府城下町は近世の利府宿と同じ場所に存在した可能性が高いことを先に指摘したが、そうであるならば、当然当時のこの地域の主要道、つまりは戦国期の奥大道もこの城下町を通っていたはずである。よって、近世の利府宿と石巻街道との関係は、戦国期段階の構造を継承して成立したものと考えるのが妥当だろう。

この点に関して、聖護院門跡准后道興の紀行文である「廻国雑記」の文明十八年（一四八六）六月の記述に注目したい。そこには、「お

くのほそ道、松本、もろおか、あかぬま、西行がへりなどいふ所をうち過て松嶋にいたりぬ」[61]とある。道興は、途中まで奥大道を進んで松島へ向かっているのだが、このうち、「もろおか」は「村岡」で利府城・城下町のこと、「あかぬま」は「赤沼」で、「惣の関」から松島方面へ向かう途中にある近世の石巻街道沿いの村である。そして「松本」は、利府町飯土井の小字で、現在「新松本」という地名となっている場所周辺の可能性が高い。[62]「松本」は、「寛永二十一年御家中由緒書上」にも付岡氏の知行地として登場する。[63]ここも、近世の石巻街道沿いである。そうなると、「松本」から「もろおか」への道筋は、ほぼ近世の石巻街道と重なることになる。第一章で述べたが、中世の奥大道の具体的な道筋は諸説あり、菅谷から北上して沢乙、利府城直下へ山裾を伝っていく道筋が有力視されているようだが、以上の検討から戦国期にはすでに近世の石巻街道とほぼ同様の道筋になっていたといえるのではなかろうか。現在も「大道」という地名が残されていることも、それを示唆する。

さて、この奥大道・近世の石巻街道と深い関係にあると思われる城館が、利府城のほかにもう一つある。それが、摂津守館である。摂津守館は、「惣の関」を見下ろす山上に築かれており、奥大道・近世の石巻街道をより直接押さえるために築かれた城館であることは、一目瞭然である。先述のように、縄張構造からも、在地領主の居城というよりも、街道監視のための関所的な性格を持つ城館といえよう。

これらの街道は、これまでの研究でもしばしば言及されてきたものだが、戦国期の利府には、もう一つの南北交通路が存在していた。それが、第一章でも述べた、利府町沢乙から北上して黒川郡へ向かう街道である。この街道については、もともと関連史料が少ないこともあって、戦国期の利府地域の構造との関係から検討したものはない。しかし、実はこの街道も当時重要な位置を占めていたものと考えられる。そのことをうかがわせるものとして、次の史料がある。

【史料4[64]】

郷古市左衛門

一、祖父縫殿丞、親伊豆、黒川譜代、上野殿より黒川・宮城境山田城御責より

これによると、郷古氏はもともと黒川氏の譜代家臣であったが、「上野殿」＝留守政景による山田城攻め以来留守氏家臣になったという。具体的な年代は記されていないが、政景が利府に移った元亀元年以降の出来事と思われる。山田は、黒川郡山田（現大和町山田）であるが、残念ながら現時点では同地に城跡は確認されていない。あるいは隣接する大和町鶴巣太田の小屋城館、大和町小鶴沢の小鶴沢館などを指すのだろうか。それはともかく、ここでは山田が黒川郡と宮城郡の境とされていることに注目したい。黒川郡と宮城郡を繋ぐ大動脈は、「惣の関」を経由して北上する奥大道であるが、それとは別に、山田を経由する街道があったことが判明するのである。

実は山田は、江戸時代には仙台城下や利府方面から黒川郡吉岡方面へ至る街道が通っていた。この街道に先行する街道が、戦国期段階に存在したことになる。では、その街道とは具体的にはどのよう

な道筋なのか。『安永風土記』には、砂押川沿いに北上し、黒川郡吉岡へと至る主要道が記されている。利府宿から深山館の直下を経由して砂押川に掛かる深山橋を渡る東西道が仙台城下から延びる道と合流し、砂押川沿いに北上していくのである。この街道は、県道三号線など黒川郡と利府方面を繋ぐ道として現在も継承されている。第一章で掲げた中世陸奥府中の復元図においても、川沿いに道筋が記されているが、江戸時代の道筋を参考に記したものなのだろう。

だが、戦国期においては、これとは別の道の方が重要だった可能性が高いのではと筆者は考えている。それは、川沿いではなく山を越えていく道、具体的には地元で「長根街道」と呼称される道のことである。「長根街道」については、遠藤光行・菅原伸一両氏の研究に詳しい[65]。それによると、町内沢乙と大和町小鶴沢方面を結ぶ山道のことで、江戸時代には存在しており、近代においても生活道として頻繁に利用されていたが、砂押川沿いの道が車道として整備されるに至り廃れていったという。利府町側の登り口は、町内沢乙の沢乙公民館脇の坂と道珍坊坂の二つがあり、『安永風土記』によると前者は「深山坂」として紹介され、一名「万歳坂」と記されている。傾斜がきついので、思わず万歳してしまいたくなるような坂道であることから、そう呼ばれるようになったといわれている。現在も、公民館脇から奥へ行くと、砂岩を削って造られた急傾斜な道の一部が残っている。公民館の裏には、江戸時代の年号が彫られた馬頭観音や出羽三山関係の石造物が多数あり、江戸時代に頻繁に利用されていたことを物語っている。

この道が戦国期にまで遡るかどうかは不明である。しかし、実はこの道に挟まれ繋がる形で存在しているのが、深山館なのである。深山館は、道珍坊坂のすぐ西側、道珍坊坂を見下ろすような位置にあり、また沢乙公民館からはやや距離を隔てた東側に位置しているため、沢乙公民館のすぐ西側にある砂押川沿いの街道とはずいぶん離れている。そのため、位置的に川沿いの街道を押さえることを目的としていないと考えられる。なお、深山館と砂押川との間には丘陵が続くが、城館跡は確認されていないため[66]、砂押川沿いの街道を押さえるための城館は今のところ存在していないことになる。

これらを踏まえて開発前の明治・大正・昭和初期の地図をみると、北側の小鶴沢方面の山中から延びてくる「長根街道」は、深山館の北側で分岐して、道珍坊坂、深山坂、深山館と深山坂の間にある坂、深山館の南端に鎮座する熊野神社の参道としての坂など複数の坂道を伝って利府の平野部へ至っている。こうしたことから、深山館周辺が利府の平野部から丘陵部へ登るポイントとなっていたことがわかる。さらに注目すべきは、現在の沢乙公民館脇へ至る「長根街道」の一部が分岐して深山館の城内に入っていることである。「長根街道」と深山館の密接な関係がうかがわれよう。深山館の城域は、本来さらに西北側に続いていたと考えられることを先に指摘したが、それとも合致する状況である。

一方、道珍坊坂と深山館は近接しているものの、直接結ぶような道は地図上にはみられない。しかし、坂上で公民館脇から延びる「長

根街道」と合流していることから、道珍坊坂経由の「長根街道」も戦国期にすでに存在し、やや迂回するものの深山館と繋がっていた可能性もある。

残念ながら、戦国期における具体的な道筋についてはこれ以上明らかにすることはできないが、「境目の城」や関所的な機能を持つ城館の場合、街道が城内を通る事例は全国的にしばしばみられることから[67]、当時の街道が深山館の城内を通っていた可能性は十分にある。熊野神社の参道は近世のものと思われるので、そうなると「長根街道」から分岐して城内に入り、「1」と「2」の間の大きな堀切「㋐」を通って「3」を経由して東尾根を進み、道珍坊坂付近に出たことも考えられようか。『安永風土記』には、深山館が所在する「北橋」に「かな坂」という坂があったことが記されている。これが具体的にどこを指すのか不明だが、場所的にこの深山館東尾根を利用した坂道であることも考えられる。深山館の東尾根直下には、古代・中世前期の遺跡である熊野堂遺跡・沢乙遺跡や塩竈神社の十四末社の一つである小刀明神社があるなど、古くから開発されていた様子がうかがわれるため、そのような道筋も十分想定できるだろう。

いずれにせよ、深山館は、江戸時代に主要道となっていた沢乙から山田を経て黒川郡吉岡方面へ至る砂押川沿いの街道ではなく、丘陵上の道である「長根街道」と密接に関係して築かれた城だった可能性が高い。これは、戦国期においては前者よりも後者の方が重要視されたことを示している。「長根街道」の起点・終点の小鶴沢に小鶴沢館なる中世城館が存在していることも、この街道が中世に遡ることを示唆しているといえよう。

そして、さらに注目したいのは、先に指摘したように、深山館と摂津守館が利府城の西と東を補うような形で存在していることである。戦国期の利府地域には、北側へ向かう街道としては、奥大道と沢乙から山田方面へ至る「長根街道」の二つが存在しており、それぞれの出入り口を摂津守館と深山館によって日常的に管理していた。このような構造を見出すことができるのではないだろうか。

これまでの検討をまとめてみたい（図7・8）。戦国期の利府地域は、留守氏の拠点城館である利府城を中心に、南麓に家臣団の屋敷、湿地を隔てた南側に城下町、東側に摂津守館、西側に深山館を配する構造となっていた。城下町は近世の利府宿と同じ場所であり、戦国期の奥大道や塩竈神社へ通じる野中大道と密接にかかわって町立てされた。城下町には、多賀国府町から留守氏家臣や被官の町人が移住し、他地域からの移住者も受け入れ、園城寺や自性院などの寺社が建てられ、都市としての形が徐々に形成されていった。利府から北へ向かうルートは、奥大道のほかに沢乙から黒川郡山田方面へ出る丘陵上の道（「長根街道」）が存在し、それぞれに摂津守館と深山館を配して押さえており、摂津守館は松島・高城方面への街道も押さえていた。このような空間構造が復元できるのではないだろうか。

（註61）「廻国雑記」（『松島町史』資料集Ⅱ、古代・中世編（文書・記録の部））

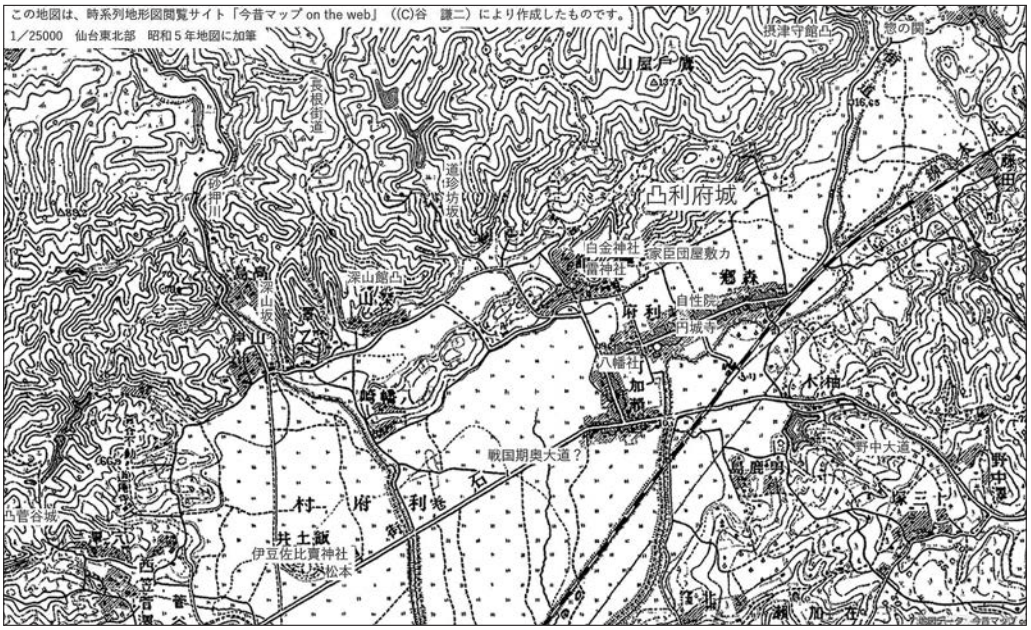

図７：戦国期利府地域の空間構造

（この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ　on the web」（(C) 谷　謙二）により作成したものです。1/25000　仙台東北部　昭和５年地図に加筆）

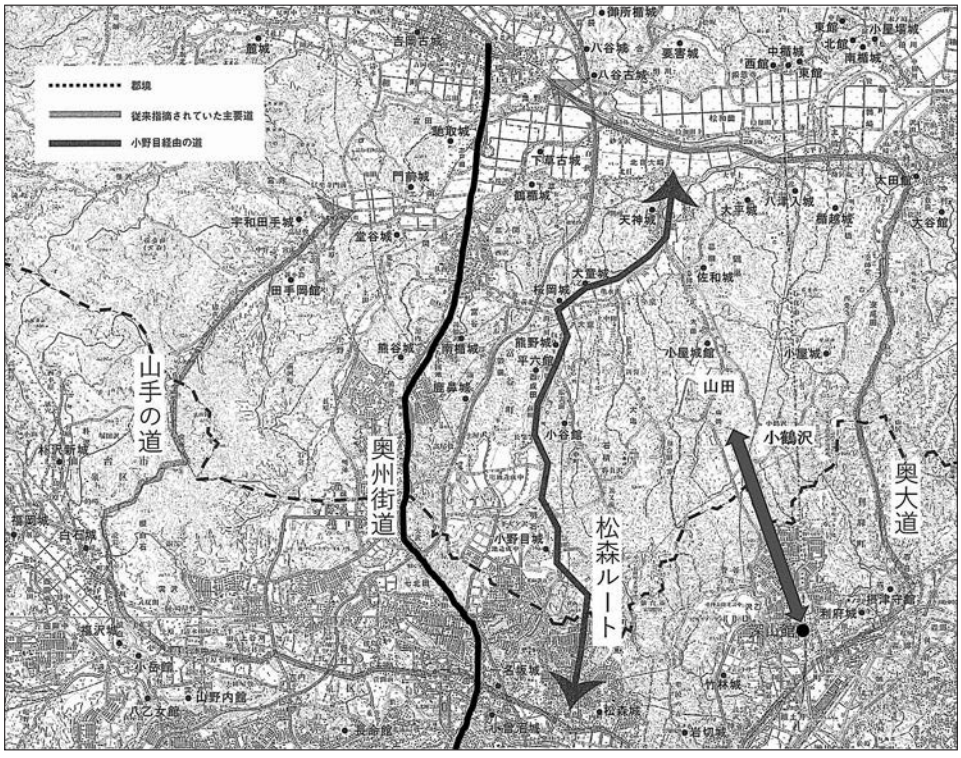

図８：黒川郡・宮城郡境目地域の街道と城館

（(註（72）三好論文より引用・加筆）

四二号）。

（註62）小澤操「廻国雑記記載の「松本」の地名のこと」（『地名』四五号、宮城県地名研究会、二〇一七年）に詳しい。

（註63）前掲註（20）九六頁。

（註64）前掲註（20）一〇三頁。

（註65）遠藤光行「長根街道のこと」（利府町郷土史会、二〇一二年）、同「長根街道のこと」「長根街道余話」（『利府町郷土史会論集』利府町郷土史会、二〇一四年）、菅原伸一『蝦夷と「なこその関」』（無明舎、二〇一四年）。

（註66）現在も山林となっている深山神社周辺も踏査したが、城館跡遺構はみられなかった。

（註67）伊豆山中城や相模足柄城などが典型例である。陸奥でも類例は多く、発掘調査により城館内を通る道が確認された事例もある（飯村均「中世の「みち」」同『中世奥羽の考古学』高志書院、二〇一五年。初出二〇〇五年）。

第四章　主要道の変遷と地域構造の変容

（1）戦国末期の争乱と松森の地位上昇

中世を通じて、まさに交通の要衝であった利府地域だが、そうした利府地域の地位は、近世にかけて次第に変化していくことになる。周知の通り、近世における南北交通の大動脈は、奥州街道であった。その奥州街道は、仙台城下からほぼ一直線に北上して黒川郡へと入り、利府を経由しないのである。

この事実は、利府周辺の地域史を考えるうえで大きな問題となる。なぜ、利府の地位が突如低下し、主要道そのものも西側へと変遷していったのだろうか。そこに、中近世移行期における地域構造の変容の鍵が隠されていると考えられる。本章では、その具体的なあり方について検討していきたい[68]。

主要道の変遷の契機は、戦国末期の宮城郡・黒川郡の政治軍事情勢にあった。天正五年、伊達輝宗の弟である政重が「代官」として国分氏のもとへ派遣され、その後家督を継承して国分盛重を名乗った。ところが、盛重は家中の統制が十分できず、天正十五年に内乱が起きてしまう。最終的に盛重は米沢へ召還されて国分氏は滅亡し、国分領は伊達氏の直轄領と化した[69]。

その直後、今度は大崎氏の内紛が激化し、家宰の氏家吉継が伊達氏を頼ってきた。それをうけて、政宗は翌年に留守政景、泉田重光らを援軍として派遣した。この援軍派遣においては、国分領に隣接する黒川氏の黒川領を通らず、大松沢や松山経由で大崎領へ侵攻していった。伊達氏と黒川氏は敵対関係にはなかったが、大崎領侵攻によって黒川氏は伊達氏と敵対するようになり、その結果伊達軍は新沼城への籠城を余儀なくされた。そして、結果的には泉田らを人質にして伊達氏と大崎氏、その背後にいる最上氏との和睦が成立することになった。

このような戦国末期の政治軍事情勢の変化により、急激に重要性を増した城があった。松森城である。松森城は、国分氏の城館の一つで、一説には国分氏の居城ともされる城館である。その松森城が、国分領の伊達氏直轄領化と大崎合戦の影響をうけて、伊達軍が恒常的に在番するようになったのである。当時の松森は、「松森口」と

称されるように、宮城郡から黒川郡への出入り口の一つとなっており、まさに境目地域となっていた。つまり、松森城は、黒川領との「境目の城」として伊達氏によって取り立てられ、重要な役割を果たすようになったのである。

第一章で述べたように、中世において宮城郡と黒川郡を結ぶ主要道は、利府を通る奥大道と「山手の道」と一般的にはいわれている。それとは別に、松森を経由して黒川郡へ至る新たな道が整備・利用されるようになったことになる[70]。この街道について、近年関連研究が相次いで発表された。

まずは、戦国期の仙台市周辺の街道について検討した菅野正道氏の研究[71]である。菅野氏は、仙台市域における戦国期の街道、特に南北の幹線道（中世の奥大道に相当するもの）について、古文書や近世の地誌類、古絵図、地名などから検討し、具体的な道筋も復元している。それによると、白石方面からやってきた街道は、名取郡北目、宮城郡小泉、南目、新宿、松森へと至り、松森から東に大きくカーブして岩切城下を通って利府、さらには黒川郡方面へと向かうというルートであったとしている。この街道のほかにも、北目付近から後の仙台城下町付近を通り、長命館、本七北田へと至り、西に大きくカーブして根白石から黒川郡宮床へと通じる街道、つまりは「山手の道」の存在も指摘している。そして、「山手の道」こそ元和九年に確定する以前の旧奥州街道であるとしている。

これに対して、別のルートの存在を浮かび上がらせたのが、三好俊文氏である[72]。三好氏は、戦国期の宮城郡と黒川郡を結ぶ街道について再検討し、そのなかで特に松森の位置づけについて詳しく検討した。その結果、戦国末期の天正十六年の大崎合戦を一つの契機として、「境目の城」としての松森城の重要性が飛躍的に高まったこと、そのためそれまで利府を経由して黒川郡へと向かっていた奥大道とは別に、松森から直接北上する街道、具体的には松森から黒川郡鍋山周辺を経て同郡明石の小野目に至る街道が新たに整備されたこと、大崎・葛西一揆勃発の際に蒲生氏郷が松森に着陣して黒川郡へ向かっているが、それはこの街道を通った可能性が高いことなどを指摘したのである（図8）。

菅野説と三好説では、松森の位置づけが異なっていることがわかるだろう。この点について、筆者は松森までの道筋は菅野説に従いたいが、松森以降の道筋については三好説を妥当なものと考えている。戦国末期の政治軍事情勢の変化により、利府を経由する奥大道とは別に、松森から直接北上して黒川郡へ至るルートが新たに整備され、両道が主要道として併存する状況が現出したということになる。この「松森ルート」ともいうべき街道の整備は、国分領が伊達氏直轄領になったことが大きく影響しているのだろう。奥大道は留守領を通るが、「松森ルート」は伊達氏直轄領である国分領を通るため、伊達氏の意思をよりストレートに反映できる道ということになろうか。

いずれにせよ、戦国末期の奥羽社会が新たに生み出したこの「松森ルート」こそ、利府地域の性格、さらには奥州街道の整備に多大な影響を与えたと筆者は考えている。この点について、節を変えて

検討したい。

（2）近世初頭の利府地域

本節では、近世初頭の利府地域、特に文禄・慶長・元和期にかけての利府地域について、今少し詳しく検討してみたい。

繰り返し述べているように、文禄四年「宮城之郡利府之郷検地名寄牒」の内容から、当時すでに近世利府宿の基本構造ができていたことは間違いない。ただし、いまだ「利府之郷」として一括して捉えられていることに注意したい。近世の利府中心部は、利府本郷、加瀬村、森郷の三ヶ村に分かれていたが、この段階ではまだ分離していないことになる。分離した時期は、『安永風土記』などによると慶長年中と伝わる。そのため、慶長期に利府地域で何らかの変化が起きたことになろう。やはり『安永風土記』などによると、慶長期に由緒を持つ利府宿の町人・寺院が多いことも確認できる。[73] 慶長期は、利府地域にとって一つの画期だった可能性が高い。

では、具体的にいつ三ヶ村に分離したのだろうか。それがうかがわれる史料がある。

【史料5】[74]

慶長二年、黄門(伊達政宗)君命シテ重綱(伊東)ガ封邑ヲ国風ニ知行ト曰フ遷シ賜フ、所謂、黒川郡大衡村、栗原郡一迫鳴子村、大崎志田之裏大崎ハ古大崎領、志田ハ郡也、加美郡平柳村、栗原郡桜目村、遠田郡長針(岡脱カ)村、同三カウヤ(高野)、黒川郡薙(茨)袋村、宮城郡賀瀬(加)村、同郡中野村、江刺郡也、一関磐井郡裏、同クリヤウ(栗生)沢、都十二邑ニシテ、九百六十石六斗七升ノ地也、其印状ハ其年号歳及ビ九月三日ト有、其下ニ墨印有、又名ハ伊藤金七郎ヘト有也、

伊達政宗が伊藤重綱に宛てた知行宛行状の写である。これによると、慶長二年（一五九七）九月段階で、加瀬村が成立していることになる。つまり、文禄四年六月から慶長二年九月の間に三ヶ村に分離した可能性を指摘できるのではなかろうか。同時に、伊東重綱に対して利府地域で知行地が宛行われていることがわかる。これと関連して、次の史料にも注目したい。

【史料6】[75]

宮城さわう(沢乙)との内

一、壱貫七百卅文

手作

同利符之内

まきの監物分

一、三百四十三文

中原藤衛門

右、以上、

慶長二年

七月廿日

宇和野甚介

伊達政宗の知行配分日記とされるものである。ここでも、慶長二年七月に宇和野甚介へ沢乙と利府で知行地を宛行われていることがわかる。ここでは「利符之内」とあり、必ずしも三ヶ村に分離して

いるようにはみえないことが気がかりである。【史料5】は九月なので、あるいはこの二ヶ月の間に三ヶ村に分離したということもできようか。いずれにせよ、利府地域での知行宛行に関する史料はほかの時期にはみられず、二点のみではあるが、慶長二年は、伊達氏による利府地域支配の一つの画期だったことが考えられよう。

では、こうした利府地域の変化は、何によってもたらされたのだろうか。筆者は、主要道の変遷が重要な背景の一つであったのではと考えている。前掲の菅野氏、三好氏の研究では、近世初頭の街道の状況については未検討であるため、その点について検討してみよう。

まず注目したいのは、次の史料である。

【史料7[76]】

（黒印）

大平九郎さへもん、かのしゝうちしたいニ、村送ニ、無相違、可相立者也、仍如件、

文禄四年

七月十七日

利符

黒川

中新田

以上

検地帳が作成された一ヶ月後、文禄四年七月に出された伊達政宗の過所である。内容は、「大平九郎さへもん」という人物に鹿を打ち取り次第それを運ぶよう命じたものだが、その経路として利府―黒川―中新田という経路が指定されていたことがわかる。利府から黒川へは、「惣の関」経由の奥大道を通ったのか、第三章にて指摘した「長根街道」を通ったのかは不明だが、宮城郡から黒川郡へ向かう際に、利府を経由する経路がなお重視されていたことを示す史料といえる。

しかし、これ以降、利府―黒川ルートの利用を具体的に示す史料はみられなくなる。その一方で、戦国末期に重要性を増した「松森ルート」は、その後も登場するのである。

【史料8[77]】

（黒印）（黒印）

彼伝馬三疋并壱宿十二人の賄、無異議可相出者也、

文禄五年

九月十一日

中新田

黒河

松森

国分

北目（以下略）

先ほどの史料から約二ヶ月後に出された伝馬手形である。名取郡北目、宮城郡国分から松森を経て黒川へ至るという経路が指定されている。松森から黒川へは、三好氏の指摘通り、利府を経由せずそのまま北上するルートと考えられる[78]。伊達氏の公的な伝馬が通る

ルート上に利府が含まれていないことになる。先ほどの史料と合わせて考えると、文禄五年段階においては、宮城郡と黒川郡を結ぶルートは、利府経由と松森経由がなお併存していたということになる。

【史料9[79]】

（黒印）伝馬五疋、無異議可相出者也、仍如件

慶長六年正月十日

登米　佐沼　高清水　宮沢　岩出山　中新田　黒川

松森　国分　以上、

これは、関ヶ原の戦いの本戦が終わり、仙台城の築城が進みつつある慶長六年段階の伝馬手形である。ここでも、黒川から松森へ出て国分に至る経路が選択されていることがわかる。やはり、利府を通らず直接南下して松森に向かう街道を通ったのだろう。先の史料と合わせて考えるならば、文禄期から慶長初期ごろには、利府は南北交通の要衝という地位を大きく低下させていったということになろう。そして、伝馬の利用という公的な問題を考えると、【史料7】の文禄四年時点ですでに「松森ルート」が主要道としての地位にあったといえるのではなかろうか。

その一方で、以後利府は別の形で登場するようになる。

【史料10[80]】

一、伝馬五疋、無異議可相立者也、但須江六郎衛門ニ壱疋、窪田内記ニ仁疋、松川大学ニ仁疋借置者也、仍如件、

慶長拾三年八月四日　御墨判

仙台ゟ高城迄上下

慶長十三年の伝馬手形だが、仙台から宮城郡高城までとされている。先述したように、利府の「惣の関」では黒川郡へ向かう奥大道とともに、松島・高城方面へ向かう近世の石巻街道も分岐していた。この伝馬手形は、まさに近世の石巻街道の原型を示すものと評価することができよう。つまり、このころから利府は、南北交通よりも東西交通との関係で登場するようになっていくのである。

【史料11[81]】

伝馬七疋、安斎はやとニ可相立候、たま山へ代物弐百五十貫文遣用、下はかり也、仍如件、

慶長十七年

九月十四日（黒印）

仙台ゟはらの町、りふ、高城、ふかや、ぬか塚、かん取、寺崎、柳津、ひねうし、まいや、大いぬ川原、つや、大や、けせ沼、気仙中

【史料10】から四年後の伝馬手形である。仙台から気仙（陸前高田市）までの経路が詳細に記されているが、原の町、利府、高城となっている。まさに近世の石巻街道の道筋である。このころになると、仙台と遠島（牡鹿半島）、気仙沼、気仙方面との繋がりが深くなっていくようであり、それとの関係で利府は東西交通の一中継地としての地位に変化していったものと思われる。

以上の検討をまとめると、おおよそ慶長期前半を境に、利府は南北交通の要衝から東西交通の一宿場町・中継地へと性格が変化して

いったことがわかる。「利府之郷」の三ヶ村への分離も、これと関連して起きた可能性があろう。筆者が調べた限りでは、「松森ルート」は【史料9】以後は見出せていないが、近世奥州街道が整備されるまでは、この街道こそ主要道であったことは間違いないだろう。おそらく、近世奥州街道はこの「松森ルート」を前提に再編・整備されて生まれたものと思われる。その一方で、中世の奥大道、「長根街道」などは、近世では「田舎道」の地位に転落していったことになろう（図8）。

こうした変化にともない、利府地域はさらに新たな性格を帯びるようになっていったようである。元和二年三月、伊達政宗は仙台の茂庭綱元に対して、秋の狩猟のため領内に「鳥之法度」＝禁猟区を設定するよう命じているが、五男宗綱に対しては二日間ほど鉄砲による狩猟を「利府之あたり」で認めている。「まぎれ者」が出るといけないので、利府の「肝煎・百姓」に「切手」を渡して知らせるようにとも命じている[82]。

しかし、その命令は徹底されなかったようである。その八ヶ月後と思われる霜月四日付けの茂庭綱元宛て伊達政宗書状によると、夏に多門主膳という家臣の内の者が「鴻」（菱食）に向かって鉄砲を撃ってしまったようで、激怒した政宗は、主膳にその者を捕らえ首を上げるように命じ、もしできなかった場合は主膳本人を処罰し、他国へ逃げてしまったならば状を付けて召し捕らえようかと述べている。

そして、四月から七月の間は、稽古のために屋敷内での鉄砲撃ちは認めたが、鳥を撃ってよいとは言っていない、このようなことになってしまったのは残念だと述べたあと、「利符之とぢめ候百姓」に、それ相当の褒美を与えて取り締まるよう命じている。許可していないところで法度に背いて鉄炮を撃ち鳥を捕るならば、宗綱も含め息子たちであっても仲違いをするとまで述べている[83]。

こうした状況から、政宗は利府地域を鷹狩りの場、鳥獣保護区と設定し、その維持管理を徹底して行おうとしていたことがわかる。仙台の近郊に位置し、広大な丘陵地・山地が続く利府地域は、鷹狩りの場として最適な地であったのだろう。近世初頭の利府地域は、そのような性格を帯びる地域へと変化していったのである。そこには、もはや中世のころのような南北交通の要衝、軍事的な拠点としての姿はみられない。

（註68）『仙台市史』通史編二古代中世を主として参照した。

（註69）国分内乱については、菅野正道「「国分盛重」と国分氏の滅亡」（『仙台郷土研究』復刊一八巻二号、一九九三年）、佐藤貴浩「戦国期国分氏家中の動向と伊達氏」（『駒沢史学』七一号、二〇〇八年）を参照。

（註70）むろん、まったく新規に開削された道ではないだろう。天文十二年六月に伊達稙宗方の大崎義宣は国分・名取・柴田と軍を進めているが、「伊達正統世次考」ではそれぞれ松森・秋保・支倉であるとしている（「伊達正統世次考」巻之九上、小林清治編『伊達史料集』下、八七頁）。

（註71）菅野正道「戦国時代の道と城――仙台市域の奥州街道前夜――」（『市史せんだい』vol.二〇、二〇一〇年）。

（註72）三好俊文「戦国時代後期における宮城郡・黒川郡の交通について」（『仙台市博物館調査研究報告』第三六号、二〇一五年）。

（註73）このほか、慶長十年段階で利府に弥四郎なる本願寺門徒がいたことが確認できる（「伊達政宗黒印状」『市史せんだい』ｖｏｌ．二一、伊達政宗文書補遺四八号、正楽寺文書）。
（註74）「伊達政宗知行宛行黒印状写」（『仙伊』参考三八号、仙台市博物館所蔵伊東家文書）。
（註75）「伊達政宗知行配分日記」（『仙伊』三六三二号、宇和野家文書）。
（註76）「伊達政宗過書黒印状」（『仙伊』一〇〇八号、佐藤文書）。
（註77）「伊達政宗伝馬黒印状」（『市史せんだい』ｖｏｌ．二五、伊達政宗文書補遺一九三号、半澤家文書）。
（註78）前掲註（10）小林論文四六九頁でも、明言はしていないが、【史料九】を引用しながら、松森から直接北上するルートの存在を示唆している。
（註79）「伊達政宗伝馬黒印状」（『仙伊』一一〇五号、天理図書館所蔵伊達家文書）。
（註80）「伊達政宗伝馬黒印状」（『仙伊』一二八五号、須江家文書）。
（註81）「伊達政宗伝馬黒印状」（『仙伊』一三二九号、北海道開拓記念館所蔵斉藤家文書）。
（註82）「伊達政宗書状」（『仙伊』一八八六号、仙台市博物館所蔵文書）。
（註83）「伊達政宗書状」（『仙伊』一九五〇号、亘理家文書）。

おわりに

本稿の内容を簡潔にまとめたい。まず、利府城・城下町、城館配置、街道網などから戦国期利府の空間構造を可能な限り復元した。そして、奥大道だけでなく山田経由の街道も存在していること、それと深山館が深く関係する可能性が高いことを指摘した。そのような利府地域が、主要道の変遷にともなって近世初頭にかけてどのような地域へと変化していったのかを、文献史料を中心に検討した。天正十六年の「松森ルート」の整備が一つの画期であり、文禄五年ごろを境に南北交通の要衝としての利府は姿を消し、次第に近世石巻街道という東西交通の一中継地、仙台近郊の鷹狩り場・鳥獣保護区へと性格を変化させていったことを指摘した。また、慶長二年ごろに地域支配の点でもう一つの画期があった可能性があることも指摘した。

史資料的な制約から推測が多くなってしまったことは事実であるが、以上の検討結果から、これまで不明瞭な点が多かった当該期の利府地域史について、ある程度明らかにすることができたのではないだろうか。今後は、なお不明瞭な留守氏の利府移転の問題や慶長期の利府地域の実態を解明していくことが重要な課題の一つと思われる。

「はじめに」の問題意識と比べて、狭い範囲における個別具体的な事例検討の比重が高くなってしまった。それでも、本稿の限界を認識しつつ、今後さらに地域ごとの事例検討（＝ミクロな視点）を積み重ね、数郡レベルの広域的な社会の変容のあり方を全国的な視野のもとに検討（＝マクロな視点）していくことが必要と考えている。政治史研究に偏重しがちな奥羽の中近世移行期研究だが、それを地域史レベルで語るための第一歩として本稿を位置づけたい。

〔付記１〕
本稿は、二〇一七年度竹井ゼミ（日本史総合演習Ⅰ・Ⅱ）の研究

活動の成果でもある。また、東北学院大学中世史研究会第五三回大会（二〇一八年七月一日）にて研究報告を行い、さまざまなご教示をえた。記して感謝したい。なお、本稿に掲載した竹井ゼミ作図の深山館の縄張図は、出典を明記さえすれば引用・転載は自由とする。縄張図の引用・転載についてはさまざまな見解が存在するが、今後も竹井ゼミ、あるいは竹井個人で作成した縄張図については、いずれも出典明記のうえ引用・転載自由とする。

〔付記2〕

本稿は、科研費（若手（B））「東北地方における中世城館関係史料の基礎的研究」（研究代表者・竹井英文）の研究成果の一部である。